



山家诗集

久崎徹真著



山家詩集乃自序

山家詩集ハ右の如き世を厭ふことの有りて都
を出て、故郷なる閑居の山家おかくれて、
獨り今昔の書籍、或ハやまと、或乃こし、西の
國の學者、文びとの作ん、まよまよとをあたし、
然らざれば造化の神の懐か、山水の寒、月花の
眺まを愛し、まよまよと世を棄ぬる時、雨
の朝、月の夕まよ、ふと想の湧き、興の起ん
まよまよと筆とりて作りぬるを、輕ハ右附の
まよまよ、されば題の排列も、元より順序也

事なきし。新体詩、やまと歌、発句、俳諧
端唄、歌々逸、其類々の胸の思ひを、拙き筆
ながと興おまかせて、おき集めたり藻塩草。
元より世の人お見えんとおハねん、唯我獨りの
山陰の友、心やりおあいつけるのみ

於時明治廿二年二月中旬

嵯峨の家の主人
矢崎徹英識

山家詩集

嵯峨の家主人作

山里お世を道れて
花の粧おれたつ塵を
避てかくる、山里の
伏虎の神お自清し
心の垢の煩惱を
月の翠のさやけきみ
洗つバ清し我思

功名富貴世の中の
人の望と一瞬の
夢の海に世を為す
涙の痕を誰か知る

嗚呼天お望の星を
地上の花の散るを
神の秘密の悲命
現はつとささめふらかな

浅間の森林の夜嵐よ
何を怒りて叫び泣く
杉の木の間夕月よ
何を憂つて影を細き
塵の浮世を棄し身を

暁の夢

夢うつつ、うつつの夢や
なまき人と面影お見ぬ
今昔無覚の窓よ

有暇の影ぞ寒しき

花と咲き花の散りども
日ハ照り日ハ曇れども
ひとり居の静覚の床よ
暁の鐘ぞ冷やう

畑の畑道

霜白き畑の畑道
月と荷あて影のみやハグ

野寺の鐘響ふ籠りて
いさ川流れ静けく
幻の夢山野の夜つ

宇宙

春の曙雲白く
所空の星の海もきて
照日の輝き昇る時
世の美あり命あり
秋の夕暮凡寒く

入日の名跡海をきいて
やさしき月の照る時よ
世の美有る息ひあり
わの夜ふけて飛相白く
むらさつるこの日は海を
初まの星の光る時
世の夢有る眠あり

夏の日昇れ、蒸熱き

さとあふふあふ今時の田子
遠征の人を思ふ人
ふる旅人の心おとす

蝦夷の濱に夕暮

春尚暑きその夕暮
蝦夷の濱に夕暮
胡砂吹く風のやまらし
潮の高しを早し

~~~~~  
りては 鳥 鳴 けり けり  
の 聲 ぞ 聞 けり けり  
の 聲 ぞ 聞 けり けり

波 子 うつ れ ぐ 龍 幽  
や と 照 せ ば 海 暗 人  
國 々 々 々 々 々 々 々  
を と 守 けり けり けり

國 々 々 々 々 々 々 々  
海 の 波 子 鳴 けり けり  
目 を 見 せ ば 海 の 色  
目 を 見 せ ば 海 の 色

夏 の 夕 の 聲 々  
招 けり 龍 の 聲 々  
冬 の 朝 の 白 雪 々  
散 けり 波 の 白 雪 々

鳴呼軒牛山頭をうづまゝに  
雨のあつては日之夜  
細血碑に松吟はるゝ  
旅魂暗くは春の暮  
~~表~~ ~~中~~ ~~頭~~ ~~北~~ ~~と~~ ~~書~~ ~~す~~

荒山頭北と望めり  
千とのお砂日暮ちを  
霧のくもゆく山暮く  
白波寄りて荒磯と

胡人日とハ荷はり、  
馬と牧ふも海りゆく

関東の大野

山頭小駒をとらめて  
日影小眉をみくらげ  
義ちるかに関東の大野  
雲に飛んで好駒ふあり  
銀の流れて碓氷川子入る



榛名の山、赤魏の山嶽  
霞霞一歩、八咫を籠て  
天高く月映て  
風寒と霜白し

鳴呼八咫の花よ、八咫の神よ、  
油、我祖先の故郷をよむ  
我祖先の故郷武者を  
皆是れ地子生長をよむ  
馬鞍の家、弓矢をよむ

恋ふる恋

身といふ思はん樹をひてし  
人の恋しさなつおしと  
まにやれどもおしと  
いつそ命、海よとて  
つねに命、海よとて  
恋の始しことのおいな

遇ふ恋

可哀やとしめて候し  
其一言を命めて  
ぞつと身み深み嬉しきの  
日の夜床の私語  
李山の昔思はる、  
其下紐のほどけしき

後朝

山の端の  
白ちうらやよの鏡

桜おとれをよんほりと  
明けゆく空を眺め候

砂の雪の肌とけて  
梅が香もはる顔の艶  
ととひ涙の目あたるよ  
眉のあはひハ目くぼる  
初を水へむ梨花一様  
髪のはつれハ泡が衆ぞ

あふべの口舌のあをばれて  
思ひきいしむ今朝なる奴  
せうつり香の道くかたぬ  
情ふなれの後朝奴  
恋慕深き恋奴あふ  
恋と命のあふ人  
空と見あふし目の中ふ  
我いよみけり恋恨

あふべの口舌のあをばれて

あふべの口舌のあをばれて  
思ひきいしむ今朝なる奴  
せうつり香の道くかたぬ  
情ふなれの後朝奴  
恋慕深き恋奴あふ  
恋と命のあふ人  
空と見あふし目の中ふ  
我いよみけり恋恨

あふべの口舌のあをばれて  
思ひきいしむ今朝なる奴  
せうつり香の道くかたぬ  
情ふなれの後朝奴  
恋慕深き恋奴あふ  
恋と命のあふ人  
空と見あふし目の中ふ  
我いよみけり恋恨

汝の黙エハ秘密なり

嗚呼未だ永劫世の秘密

天地の身を蔽てバ

楫を拂ふ夜山嵐の

何処より奴来て何処へ思去る

海邊の雑吟

白帆や海に影あり富士の山  
月夜に秋身もあや海のそよ

杜鵑み寄ん

ほととぎし何を恨みて世をバ啼く

雨さみだるし雨の夜ハ

夢し弦はぬ世の人の

胸いましむるを歎

なく音もじさるぬハ

白き卵の花血もぞ深む

あともはせい

~~白き卵~~

袖たもとの裾すそは拂はらへば落おつる  
顔かほはぬられし泥どろの  
洗すすつど落おれぬ身の無念  
腰こしの刀やいばはどんどんのさゝぬと  
ありくる雨あめも飲のみひさく  
日本堤日本堤の也やふ園園女  
なごや早はや日の時ときを  
行いとわけし一ひと声こゑを  
宙ちゆうを飛とぶるかや愛あいの  
劍けんの光ひかりあらやとせし

前途ぜんずの遠とほし一ひと鳥とり東あづまの大野のほ  
わけどもその茫ぼう々々  
わけどもその月つき一ひと輪りん  
哀あはれ且また野のの果は何なに処ところぞ

東あづまの床とこの夢ゆめも哀あはれ  
秋あきの夜よふちを風かぜをく  
千里せんり他た從したがつと秋あきも  
見み上人じゆんじんの孤こ影かげを思おもひみて月つき一ひと輪りん  
月つきの孤こ輪りんを上げきて人を照ある

天上の月、天上の影  
相照し、相思ふて千里をゆく

遠麻石の像を題に

日影氷の子の影の  
壁を白ひて白眼を  
元くハ影映人の身  
片まみみ風ふき  
影の影の影の影  
影影寒し禪僧の

茫茫と宇宙唯一人

五

形は天地の間  
父母の生れれば妻もな  
妻の生れば子もな  
野山に袖をかき  
苔の筵に眠る身ハ  
誰と女とし送るべき  
心の遠く世を離れて  
造化の神の懐を

めらりつちも唯獨り  
天地の向ふ高吟ん

赤美人

春阿ヶぼの、東山  
霞たはびくその朝  
流々清き如哉川の  
水で洗ひし時二重の  
肌膚をいしき赤美人  
柔色が涼みの縁の端

秋の夜長をぬしき過り  
夢の向おしき睦話の  
契みぢりきうき合ん  
つとる流も向ふものを  
あれ意地也るな鳥の聲

おのせ世をいとひ付りて此女よぶらる  
鄙の里かかくれよより我女とて  
ハ木林の空、地のは、水の流、よそ昔今  
の書上書、ちよと、とろこし、おのせの世の

文人の作れる文などの外も世に知らず  
よみ付る

世をきて ~~世~~ 山里の入りしより  
あめつち文の外も友なし

<sup>此地</sup> 又かゝる山里ながら尚 ~~世~~ 世に  
ちりのいまは ~~世~~ 世を覚えずはれ  
は ~~世~~ 世に

世とあひま我山里の入りぬとど  
なほこいぬしと世のほこのさつ

山里の春の曙

身おろりあゝる世の塵を  
避てかくす山里の  
有明をいし春の曙  
庭ふ来となく鶯の  
声もやさしや窓の梅  
一輪のめはほろし  
袖ふこぼれて風うほる

救世主の画像 ~~対~~ して (カリソフの詩を意譯し)  
我等の主なるイエス君よ



汝も捧し燈火を  
我今此処に打消しぬ  
我等の主なるイエス君よ  
汝の賜ひし所教の  
聖書と我今閉したり

されど天なる汝の光  
尚永久に輝き燃ゆ  
されど無限の汝の世界  
尚目の前に見ゆ

我等の主なるイエス君よ  
安きとよし弱き身も  
外面に嵐ささぐ夜も  
輝く所面拜む時

衆の世界にいそびよ  
汝も怒りて友をばよ  
衆の世界にいそびよ  
汝を死衆に定めよ

荊の冠着とまふ  
十字架も揚されとまひし  
河の静け安らふ  
死に到る迄仇の爲め  
河の祈を絶ざりき

牧羊のまはるく又君よ  
安きとまふ弱き身  
斗面ふ花ささぐ夜  
輝く所面輝む時

むらぶるはわハ一傑の  
うもとのやける花道のみ

漢翁

しるしと夕霧わく  
利根の河辺ふみまは  
とらて静ふ形やれ  
衣の袖と目あま  
岸の柳とけり花籠む

さくら月影をふところふ  
かき抱きしむる船の感  
根を枕の片敷バ  
ふらふらとゆく波静ふて  
草の葉の影の風涼し

嗚呼世人何と汝も同ふ  
古今の興之盛衰は  
浮世の浮沈栄枯の影は  
見よの顔とめくらせは

まぼろし  
~~の影~~  
の影

冬夜の野道 (アウシヤンの詩と訳を)  
天の深きつた霧と  
流れるつる月の裏はくも  
野末お氷る雪の上  
しろく 落る影哀れ

さびしき冬の野道をバ  
靴の音も馬車おれバ

とほちの里よ木積はる  
秋夜もさつて夜は静か

何と秋のさつ 駒の歌  
ふしと哀れさつ 清めさ  
細さ調かさつめく  
芭耶 芭耶 芭耶

燈火の影さつ花の影と  
能えさつ雪さつさびさつ

葉の影と皆さつせ  
さつハ山河の眺み

れめよ人事の難さつ  
さつ笑て自然の影  
いと水とよ放浪し  
月お向て高吟せん

軍營の秋の夜 謙信の詩の意譯  
鋒とりて顧望まれば

霜白く軍営小満ちて  
天高く風寒し

雁越行空と過れば  
声悲しく山坡お落て  
月清く夜静なり

越の山、能州の景  
今を合せて我領とせんと  
面白し男児の業